

桂 二葉／咲くやこの花インタビューvol.37

桂 二葉(かつら・によ)【令和4年度 大衆芸能部門[落語】】



令和4年度「咲くやこの花賞」《大衆芸能》部門は、桂二葉さんが受賞しました。「ひとときわ高く明るい声で、突き抜けた落語の“アホ、”を演じる独創性の高い高座は唯一無二である。2021年のNHK新人落語大賞で大賞に輝き、女性初の受賞ということも相まって一挙に知名度を上げ、既に自身の独演会を各地で開催するなど活躍著しい」との評価を得た二葉さん。今や紹介文に必ずついてくる「女性初」という枕詞についてや、落語の“アホ、”への共感など、ざっくばらんに語ってくれました。

取材・文／岩本和子

「フラットな状態で見たい」

まずは受賞のご感想をお聞かせください。

そうですね…賞をいただけるのは本当に嬉しいなと…。畏れ多いと思いますが、光栄なことです、本当に。

2021年に「NHK新人落語大賞」を受賞されて以来、「女性初」と言われることが多くなり、「もうそれはいいです」ともおっしゃっていましたね。

最初ということになっているので仕方がないと思うことはあるんですが、それを言うとね、「今まで獲られへんかったんや」っていうことと一緒に、「やっぱり女には(落語は)難しい」と言っているのと同じような感じがするんですね。でも「女性初」をつけると引きがありますしね、その気持ちもわかるし、難しいなと思ってます。そう言うことによって「そうなんや」って興味を持って見てくれる人もいるし。「やっぱ落語って難しいものなんや」と思って見られるのもったいないしね。フラットな状態で見ていただきたいなとはとても思うので。

その一言で、良くも悪くも色がついてしまう。

そうですね、はい。

やっぱり難しいものなんですかね。

難しいとは思います。



それは登場人物に男性が多いとか、そういう事なのでしょうか？

そこはあんま関係ないと私は思っていて。男の人がずっとやってきたから、それを見慣れていたり、やり慣れているんですよね。そういうように形が決まっているので、みんながその認識

が強い。そこを女がやるとやっぱ違和感があるということだと思っんですよね。違和感さえなければ別に、全然できるというか。やっぱり異性を演じるのは不自然なんですよ。その不自然さが笑われへん。何か痛々しく見えたりするので。

自然に演じることができたら、その違和感は払しょくされる…。

何ていうのか、女性らしい仕草ってあるじゃないですか。落語でも、ちょっと襟を触ったら女将さんになるとか、そういうことを含めて一発目の印象がめっちゃ大事なんですよね。「あ、今、女の人やな」って印象付ける。それだけのことで。だから、印象付けの第一発目はそれらしくしゃべるようにしているんですけど、でも、「この人はこういう人間なんだ」ということを意識してしゃべっている気はします。

そんな中、快進撃が続いていますね。「第17回繁昌亭大賞」大賞、「関西元気文化圏賞」ニューパワー賞と続けて受賞されました。「関西元気文化圏賞」では、受賞のスピーチも良かったですね。

何を言ったか覚えてないですけど(笑)。

「元気が出ます」とよく言われますと。けど、「ほんまは違うんです」と。



そうや、「二葉ちゃんの落語は元気出るわ」ってよう言われるんですよ、ほんまに。いや、与えてへんと。結果、そう受けとめてくれてはるんやったら嬉しいですけども。

二葉さんの持っている明るさ、天真爛漫な感じとか、そういうところで元気がもらえるんだろうなと思います。とはいえ、一番は、面白いと思ってもらいたいですか？

「思ってもら」というのはおこがましいと思っているので、ほんまのことを言ったら、お客さんのことなんて考えてないというか、自分のことを一番に考えてます。結果、喜んでくれはったらとっても嬉しいですけど、自分の欲求を満たすためにやってるところがありますね。

「私の方が絶対アホやと。どっかで自信があった」

今一番満たしたい欲求とは？

これは本当にぶれてないんですけどね、ずっと。やっぱりアホな人をやるんが本当にたまらない快感というか。生きてるな～って感じがします。

いろんなアホがいると思いますが、好きなタイプのアホはいますか？

えっとね、「天狗さし」のアホの人も好きですし、「池田の猪買い」に出てくるアホな人も好きですね。

彼らに共感しますか？



共感しますね。私、本当にアホでしたので。別に卑下してるわけじゃないんですよ。本当にね、どうしようもなくって、中学校の成績も1ばっかりやったんです。文字にすごい疎いというか、すごい苦手やったんです。今、よう落語やってんなって感じなんですけど。本当にもう絶望的やったんですよ。行く高校もないって言われて。

そうなんですね。しんどくなかったですか？

めちゃくちゃしんどかったです。でも、「お前、アホやな！」みたいな声がありますわね、他の人が言うた。それに対して「負けへん」と思ってたんです。「私の方が絶対アホや」と。どっかで自信があって、「あんたのアホなんて大したことない」って。私、テストで、例えばベートーヴェンの写真があって、「この作曲家の適当な名前を書きなさい」という問題の答えで、自分の名前を書いたんですよ。適当に書けって言うから、何でもいいかなと思って自分の名前書いて。でも、それも一生懸命考えたんですよ、マジで。「適当」の意味を教えといてもらわんと、本当にわからへんから。母親も笑ってましたけどね(笑)。ほんで、突拍子もないアホなことをしてしまったりするんですよ。でもどっかで恥ずかしい。ええカッコしいなんですよ。だから、ずーっとアホを隠してたんですよ。ばれたら怖いと思ってて。

アホに自信がありつつ、でも隠していた。

私もうわーっ！ てしたかったんですよ、クラスのイチビリの子みたいに。すごい憧れてて。堂々と自分をさらけ出す姿がかっこいいなって思ってたんですよ。それがね、基本的にずーっとあったんですよ。そこで落語と出会って、「うわ！ これや！」ってなったんですよ。

落語の世界ではアホが堂々と生きてますもんね。



そうなんです。キラキラしてますやん。人気者やから、落語の中では。それでバチーン！ときて。「これや！」ってなったんですね。落語に出てくるアホは本当に他人事とは思えない感じがしますね。ただ、私はアホやから文字を覚えられへんし、読むのも苦手やし。でも、米朝一門やったらちゃんと教えてくれるんじゃないだろうかと。私らみたいな本当にだめな人でも、手とり足取り教えてくれそうな気がしたんですね。それがうちの師匠(桂米二)やったんです。

落語のお稽古はいわゆる「口移し」、聞いて覚えるそうですが、その方法が合っていたのでしょうか。

いや、相当時間がかかりましたね。一番覚えが悪いって言われました。「道具屋」っていう15分のネタも、半年かかったんですよ。根性論は好きじゃないですけど、落語を覚えるのはほんまに気合と根性ですね。もうこれで生きていこうと思ってるので、何としてでもしがみついて。落語に生かしてもらっているなっていう感じはあります。

落語に出会ってからは、これでいこうと。

そうですね。これはおもしろいなと思いました。女は落語をやるのは難しいっていうのも素人のときから見てて思ってたんで、何で難しいんやろなって四六時中考えて、本を読んだりしてましたね。

何か答えは見つかりましたか？



案外ね、みんな気づいてないんですよ。「声が高いから低くせえ」とか言われるんですけど、そんなことする必要はなくて。自然なのが一番なんですよ。それは思います。若い男の子が旦那の役をやったって難しい。それと一緒にことだね。あと、おもしろい、おもしろいもほんま関係ない。男も女もおもしろい人はおもしろいし、おもしろくない人はおもしろくないしということやと思います。

ちなみに、どんな本を読まれたのでしょうか？

米朝師匠の『落語と私』という本を前から読んでいたんですけど、「なぜ女の落語家がないのか」という文があって、「何百年もの間、男性がやってきたので、こうこうこうで難しいです」と。「自分も何人も志願者を断ってきた」と。「自分の芸でいっぱいいっぱいなのに、またもう一つ新しい芸を作るぐらい難しいと思う」と。でも、そこで終わってないんですよ、米朝師匠は。「僕は、女性の落語家を否定しません。歓迎します」と。要するに、「うんとうまい人が出てきたらいい。そういう人を待ってます」みたいなことが書かれていて。米朝師匠ってね、すごい人だなと思って。ずいぶん前に書かあったものですけど、閉ざしてないところがやっぱすごいなと思います。落語の可能性をめっちゃ考えてはったんやなって。

そこで米朝師匠が「無理やと思います」で終わっていたら、道は開かれてなかったかもしれないですね。

かもしれないです。やっぱり米朝師匠は素晴らしいなって。最近、読み返して思いました。ほんまに会いたい。

お会いしたことは？



あります。入門した頃に、(二葉という)お名前をいただいたときにご挨拶に行かしてもらいました。その時、私の髪型がアフロやったんですけど、「(アフロは)流行ってんのか？」って言ってはって。「流行ってはないですけど、ちょっと好きでやらせてもらってます」って言うたら、「おお、ええがな」って言われました。

目指すは「この人、何食べてんのかなとか思われる芸人」

落語もさることながら、今年から『ぽかぽか』(フジテレビ)の水曜レギュラーですね。生放送はいかがですか？

どうしていいかわからない3時間が過ぎていってますね(笑)。いつもは、自分1人で完結するので、めっちゃ難しいです。みんな、ボケたり、ツッコんだりして遊ぶけど、私ら自分でボケて、自分でツッコむから、当たり前やけど、どうやってツッコむか自分でわかってて言ってるじゃないですか。だから、自分のことさえ考えたらいいんですけど、人がどうボケるかとか、わからへんのですよ、本当に。

そうなんですね。



でも、「やったらすごい勉強になる」って笑福亭鶴瓶師匠や桂吉弥師匠にも言われました。テレビはほんま、難しいです。でも、(出演依頼を)言っていた限りは一生懸命、頑張ろうと思ってます。それで落語を知ってくれはる人もいはると思うし、もちろんテレビの仕事として頑張ってるんですけど、落語会とか繁昌亭に来てもらいたいなっていう気持ちはずっとあるので。

落語会でもお客さんが増えたのでは？

その印象はありますね。

ちなみに、二葉さんのお客さんはどんな方が多いですか？

私ね、女性の方が多い気がしていて。40代のお姉さんとか。最近は若い男の子もなんか増えてきて、恥ずかしい。見られるのは恥ずかしい(笑)。こないだ広島県から20歳の男の子が見に来ました。弟子入りかなと思って。その子とお茶行こう言うて。広島から来たのわかってたんで、「アップルパイごちそうさせて」って一緒にお茶行ったら、「僕、落語家になりたい」言うて。嘘やろ、(弟子とんのは)早い早い。でも名前どうしよう…とか考えてたら、横のマダムが「誰のとこ行きたいの？」って。ほなら「桂〇〇さんです」って。東京の落語家さんでした。でも応援しててね、彼のこと。2人会やろな言うてて。

10年後くらいには、もしかしたら実現するかもしれないですね。

そうそう、本当に。広島に独演会で行ったときも、熊本の大学生が見に来てたり。なんかちらほら、そんなんあってね、最近。

今後、どういう落語家さんになっていきたいですか。

これ、ほんまいつも困るんですよ(笑)。やっぱり落語がうまくなりたいっていうのがすごくあって。

誉め言葉は何が一番うれしいですか。



やっぱ「おもしろい」が嬉しいですね。でも、うまくないとおもしろいのが生きてけえへんし。おもしろくて下手みたいなのもいいんですけど。でもやっぱうまくなりたいですね。これ、本当に伝わるかわからないんですけど、この人、何考えてんのかなとかね、何食べてんのかなとか、そういうふうに思われる芸人になりたいです。興味深いというか。「こいつ、どうやって死んでいくんやろな」みたいな、そんな感じで思われたいです。

二葉さんにとって、そんな方はいらっしゃるでしょうか？

私、戸川純ちゃんが好きで。私、いつも思うんですよ。「この人、何食べてんのかな」って、純ちゃんを見ててほんま思うんですよ。カッコいいのはもちろんなんですけど。そういう感じです。

最後に、二葉さんが「咲くやこの花賞」を贈りたいと思う、大阪市の良いところ、好きなところを教えてください。

ぱっと思いついたんは上本町にあるハイハイタウン。ハイハイタウンがめっちゃ好きで。あの上に住みたいくらい。あそこは何かガチャッとしててね、なんか好きですね。ちょっと古いね感じの建物の中にちょっとした噴水があって、何かごちゃっとした文房具屋があったり、おもしろいんですよ。雨に濡れずに外国に行けますしね、確か。近くに関空までのバスが出てるから。お店の無愛想なおばちゃんとかもいい感じで好きですね。